市民の横顔 FACE

鳥の巣とともに歩んだ60年

日本一の鳥の巣コレクター
小海途（こがいと） 銀次郎（ぎんじろう）さん

日本では、250種類を超える鳥が繁殖し、それぞれが巣を作って卵を産み、ヒナを育てています。この鳥の巣を標本にして集めているのが、市内在住の小海途銀次郎さんです。

●10種類の鳥の巣が収集の始まり

小海途さんは、約60年前、鳥や自然が好きな仲間たちとともに「南大阪野鳥研究会」という野鳥の会を立ち上げました。活動の発表会を開催した際、10種類ほど野鳥の古巣を展示したのですが、終わった後、処分するのは惜しいと思いすべてを引き取り、その後も機会があるごとに鳥の巣を増やしていったのが収集の始まりだったそうです。

●鳥の巣の形状は千差万別

「鳥の巣と一口に言っても、鳥の種類ごとに巣の形状は全く違います」と小海途さんは語ります。巣の材料や作られる場所、大きさや形などは千差万別。同じ種類でも生息地域によって巣の材料が変わるなど、収集するたびに興味が尽きないそうです。また、鳥の繁殖期に巣の場所を特定し、繁殖が終わったあとに収集するため、「ヒナが巣立つまで何度も足を運ばなければなりません」と収集の難しさも話します。市内で繁殖するカワセミは、土手に穴を掘って巣を作るため、壊さず土ごと採取しなければならず、かなりの労力が必要だったと振り返ります。

●ごみでできた巣が訴えること

小海途さんが鳥の巣の収集を続ける中で、自然環境の変化にも気付かされたといいます。例えば、昭和40年に野池で採取したカイツブリの巣は、自然に生えたヨシだけを集めて作られていましたが、30年後に同じ場所で採取した巣は、池に捨てられていたごみを集めて作られていたそうです。「30年の間に私たちがどれほど環境を汚してしまっているのか、カイツブリの巣に教えられました」。

●鳥の巣収集60年の集大成

小海途さんは、市内だけではなく、全国各地で鳥の巣を収集しました。その数は400点を超えます。今回、そのすべてを大阪市立自然史博物館が引き取り、展示することになりました。「約60年で採取可能な多くの鳥の巣を集めることができました。卵を温めヒナを育てた巣を私に提供してくれた野鳥たちに感謝するとともに、ほっとした気持ちです」と、小海途さんは思い入れのあるクマタカの巣を見つめながら話してくれました。

■特別展「日本の鳥の巣と卵427」

とき 6月19日(日)まで▽時間は午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）▽月曜日休館

ところ 大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区）

問同館（☎06・6697・6221）

▼本市で採集したカワセミの巣▶水上に浮き巣をつくるカイツブリ。水面に浮いているもので巣をつくるため、ごみが増えた池では右写真の様なごみだらけの巣に